

生気象学と学会に大きな足跡

——神山恵三先生をしのんで——

共立女子大学、神山恵三教授は昨年12月22日、肺ガンのため逝去されました。享年71歳でした。

先生は気象研究所に30年の長きにわたって勤められ、気象学と医学との境界領域にある生気象学の基礎を確立されました。とくに気象環境と生体を結びつける環境科学の草分け的存在でした。数多くの論文・著作を公にされ、きわめて広範な学際的見識を実生活の問題とも結びつけられました。

日本学術会議会員、本学会の理事も歴任され、戦後の研究体制づくりに偉大な貢献を続けられました。わけても公害問題、国際環境保全科学会議の開催、学問、思想の自由委員会などで中心的に活躍されました。

科学者運動にも積極的に参加され、日本科学者会議の役員として献身され、その活動のスケールの大きさに圧倒される思いでした。

戦後の荒廃した時代に、高円寺に衛生気象研究室を再建され、増山先生などと共に新しい小数例の統計学による生気象学を推進され、専門外の私たちにも多大の刺激を与えました。

応用気象研究部になってからも、快適な気象条件とは何かという課題から、体感温度、快適温度、不快指数など感覚につながる量の客観表現方法を解明されました。

さらに気象環境の生体へのインパクトを量的にとらえるため、皮膚温度、ガス交換による代謝測定などを行い、「寒冷刺激によるプレチスモグラムの変動について」の論文により東京歯科医科大学で医学博士を受けられました。

これら研究の延長線上の一つとして、気象のvariabilityに群発するリュマチや神経痛などの症候群の解明と、西ドイツで実施されているような医学気象予報へのアプローチを考えておられました。



気象環境のより積極的利用の面からは、温泉気候、療養気候、快適な居住条件と冷暖房、衣服の科学、スポーツ、リクリエーションなどの生活に密接な分野に対しても、その生気象学的根拠を追究されました。

とくに「森林浴」という新しい言葉を導入され、樹木から放散される有機エアロゾル粒子が森林のブルーヘーズの核となるばかりでなく、人の健康に対しても有効な刺激をもつことを解明されました。

先生は気象研究所の筑波移転を前にして、東京農工大学の大気環境学の担当教授として文部省へ外向されました。同大学を退官後も共立女子大学の被服衛生学の教授として教鞭をとられました。

つねにこやかで、若々しい情熱を学問と社会にむけられた美しいご生涯でした。ご冥福をお祈りいたします。

(元気象研究所応用気象研究部 現武蔵大学非常勤講師・矢野 直)